



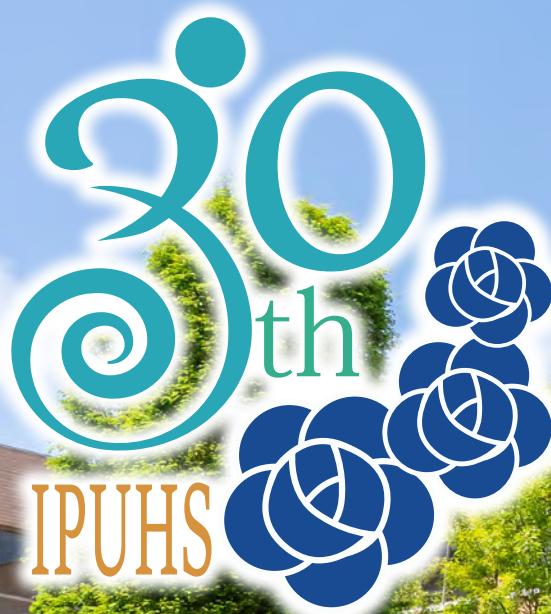
茨城県立医療大学 広報誌
IBARAKI PREFECTURAL UNIVERSITY OF HEALTH SCIENCES

IPUHS

vol.012
2025/03

通信

茨城県立医療大学は2025年に開学30周年を迎えます



地域とともに30年！ さあ、次のステージへ

茨城県立医療大学30周年記念講演会のご案内

開学30周年を迎えるにあたり、本学の開学以来の歩み、変遷を踏まえ、記念式典・講演会を行うことにより、建学の理念及び地域社会に貢献する本学の使命を再認識するとともに、これからの本学が果たすべき役割について広く発信することを目的としています。

日時

令和7年5月29日(木)
開学記念日

講師

添田 智恵氏

車いすバスケットボール日本代表ヘッドコーチ
シドニーパラリンピック銅メダリスト

場所

茨城県立医療大学
大講義室

※詳細については本学Webサイト「30周年記念特設ページ」をご覧ください。



新学長インタビュー

阿部 慎司

Abe Shinji

2024年4月、第8代学長に
阿部慎司先生が就任されました。
そこで、阿部新学長に、
茨城県立医療大学学生広報員（SPA）の
メンバーがご経歴や本学の魅力、
今後のビジョンについて
お話をうかがいました。

先生の経歴について お伺いいたします

出身は青森です。生まれも育ちも青森で、21歳まで青森にいましたので、今でも地元に戻ると津軽弁になります。弘前大学3年制短期大学診療放射線技術学科を卒業後、診療放射線技師として東京に出てきました。勤務先は癌研究会附属病院（現有明病院）、がんの専門病院で14年間勤めました。最初の2年間は撮影、その後は核医学の部署にいました。

働きながら夜間、東京理科大学に進学しました。勤務先ががん専門病院だったので、当直がほとんどなく、夜、大学に行ける環境でした。その時に、高校の教員免許を取りました。その時は、高校の物理の先生になるのもいいなと思っていたので、夜間の、定時制の高校に教育実習に行った思いがあります。

その後も働きながら日本大学大学院に進学し、博士号を取得し、本学には平成7年の開学と同時に着任しました。大学と同じ、今年29年目です。今年（2024年）4月からは学長に就任しました。

先生の研究のご専門について 聞かせてください

東京理科大学から大学院では素粒子理論。広がり模型の一つである双極所模型についての研究をしていました。紙と鉛筆とギリシャ文字を使う学問で、もしかしたら日常から最も遠い研究分野の一つかもしれません。着任後は、医学物理学の中の一分野で、放射線診断物理学を専門としています。これは、X線検査、CT、MRI、超音波検査の動作原理・イメージングと基礎物理に関する領域で、その中で「X線画像の画質評価・解析」「X線CTの画質評価・解析」が主な私の研究領域です。大学院で研究していた量子力学ではフーリエ解析をもとにしている、波として扱うのですが、これは診断物理学と親和性が高くて、現在の研究に移行することができたと思います。

難しい言葉が出てきましたが、 どのようなことでしょうか？

声や音色をフーリエ解析すると波形、声の高い・低いは周波数の重なりあわせで、人の声の特徴を捉えることができます。「フーリエの冒険」という本が

ありますが、この本は、文系の方がフーリエ解析を理解するために文系の立場から書かれたものです。図書館にあるのでぜひ読んでいただければと思います。

先生が物理に興味を持った きっかけは何でしょうか

高校の時は物理が苦手で、赤点を取ることもありました。ただ、高校生の時、中学か高校の先生になりたいと考えていた頃、当時文系の先生はなり手が多いと聞いたため、じゃあ理科の先生になろう、理系に進もうと思ったんですね。その時から、苦手だった物理を一生懸命勉強を始めました。

ただ、好きになったと言えるようになるのは、大学に進学してからかもしれません。だんだん数学に興味を持ってきた頃に「物理数学」という本をたまたま手に取ったのですが、今までわからなかった、苦手だった物理がすごくよく理解できるようになって、それこそめり込むようになったのはその頃だったと思います。

大学に就任後、思い出深い出来事がありますか

開学数年前から準備が始まっていたので、臨床業務の傍ら学科に係る準備、備品の購入などもしていました。当時各学科・センターの着任予定者で集まることもあったと思います。

開学、着任後も、その2年後には付属病院の開院、7年目には大学院・修士課程の設置など大きなイベントが続きました。一番大きいのはカリキュラムの改正。着任してからカリキュラムに関わるが多く、特に、各専門職の養成規則が大綱化されて、単位数に抜本的な改定がなされた時期がありました。この改定作業では、診療放射線技師養成規則の改定についても養成校の立場として関わりましたので、他の養成校の担当者同士で、大学の学生寮みたいな場所

に集まって、泊りがけで議論したこともありました。大変でしたが思い出深く感じています。

研究では、千葉にある放射線医学総合研究所（現量子科学技術研究開発機構）で重粒子線を用いたイメージングへの応用の実験を行いました。重粒子線CTでは、原理的に、X線CTに比べ電子密度の空間分布をより精度よく求めることができ、放射線治療精度向上が期待できると考えられます。この実験をするための機械が、日中は診療で使われているため、夜間しか使えないんですね。そのため、夜から明け方まで実験して、実験が終わったら、朝、大学に戻って業務をするということもありました。体力的には大変辛いのですが、チームで行う実験はおもしろかった。良い意味でも思いついていないです。

大学の良さはどんなことだと思いますか

本学は保健医療系の単科で、学生数もさほど多いというわけではありません。そのぶん教員と学生の距離が近い、いわゆる「少人数教育」が誇れるところの一つです。



さらに、医療職の教育の場・臨床研究の場として、公立の保健医療系大学では、唯一の付属病院を設置しています。

大学に病院があることは当たり前のように感じていました

大学における付属病院の設置について、医学部・歯学部には設置基準がありますが、保健医療系大学にはその義務はありません。大学開学のときに、本学の建学の理念について、県が深く理解してくれていた表れだと思います。

また、学部教育では、各学科は臨床経験豊富な教員から構成されています。さらに、基礎医学・臨床医学を専門とする医学センター、リベラルアーツや自然科学などを専門とする人間

科学センターが設置されています。このような教員スタッフの構成を持った大学は、ほかにはないのではないのでしょうか。

学長に就任し、力を入れたところ 意気込みをお聞かせください

減少傾向であった18歳人口が、現在踊り場の状態といわれている時期ですが、あと4、5年もすると再び減少してゆきます。したがって、予想される困難な状況に対応するためにも、「いかにして本学の魅力を高めるか」を強く意識して、ブランド力の向上、受験生の増加に資する大学運営を進めていきたいと考えています。

本学は2024年8月に茨城ロボッツとの連携協定を締結しました。本学は車いすバスケットボールが盛んで、「障害者スポーツ研究会ROOTS」は、昨年の全国大会で優勝するなどの実績があります。現在、本学が主体となって車いすバスケットボール体験を通じた交流事業の開催を企画しています。今後、受験生にとっても、茨城ロボッツとの連携が大きな魅力のひとつになるのではないのでしょうか。そのほかにも、地域への貢献

と参加するすべての人々のウェルビーイングに寄与することができるような大学のプラスポイント推進機能の強化も検討しているところです。

最後に、広報誌を読んでいる方へのメッセージをお願いします

本学は2025年に開学30周年の節目の年を迎えます。地域とともに歩んできた30年ですが、これからも地域に愛され、卒業生が「本学で学べてよかった」と思える大学を目指していきたいと思っています。

学生広報支援サークル・学生広報員（SPA）は、学生の視点で本学の情報を外部に発信する活動を行う医療大学公認のサークルです。



医療大学のこれ

までとこれから

【卒業生インタビュー】

聞き手

佐藤 純

人間科学センター教授

2025年に茨城県立医療大学は30周年を迎えます。それにあたり、本学の卒業生であり、現在教員として勤務されている先生方にお話を伺いました。

▼医療大学を選んだきっかけ

——まず本学を受験したきっかけについて、お聞かせください。

橋 高校卒業後、筑波大に進学して、ちょうど卒業する年に茨城県立医療大学が開学するっていうタイミングだったんですね。

私が高校生のときは、4年制大学で理学療法士になれる学校はまだなくて、当時、理学療法士になるには4年制の大学に行ってから3年制の医療技術短大、もしくは専門学校に行くっていうのがわりとスタンダードだったんですよ。でも、筑波大在学中に自分が怪我をして、患者として理学療法のリハビリに通ってた時にご紹介いただいたのが、福屋靖子先生っていう理学療法士の中で草分けの方で、「理学療法士になりたいんだったら、

ちょうど阿見に新しい大学できると、いろんな先生が集まってきたり、受けてみたらいいんじゃない」って言われたのがきっかけです。

——ちょうど橋先生の人生の節目と、いろんなことが偶然重なったような感じですね。

橋 そうですね。いろんなタイミングで、こう導かれるように来た感じですね。

藤田 私はですね、元々建築系の学科を希望していたんですけど、たまたま高校生の時に盲学校に行く機会があって、その時、雨が降って床が濡れていて、おそろく目が見えない子が私にしがみついていたんですね。その時、障害についてそれまで何

とも思ってたなかった私が、あ、この子達って大人になったらどうなるんだろうとか、ふと思うようになって、福祉って何だろうとか、医療に関わる仕事ってなんだろうと考え始めたのがきっかけです。ただ、今みたいインターネットで調べたりすることができなかった時代なので、医療大に決めた後も、作業療法っていうものがどういう職業なのかっていうのが、実は正直知らずに受験したっていう経緯があります。なんか粘土で土器を作ったりするらしいとか聞いて、土器作るなんてドキドキするね、なんて、もう具体的な仕事内容については本当に分からなくて。ただ、医療機関の中で人と関われる仕事っていうところにはすごく期待するものもありましたし、やっぱり自分が住んでいる県の大学ができて、自宅から通えるということも大きかった気がします。



布施 拓 准教授

放射線技術科学科・第7期卒業生

大江 佳織 准教授

看護学科・第7期卒業生

橋 香織 准教授

理学療法学科・第1期卒業生

藤田 好彦 准教授

作業療法学科・第2期卒業生

▼大学の変わったところ・ 変わらないところ

——先生方が学生だった時と今で、変化してきていると感じる
ところがありますか？

布施 学科の横の繋がりが増えたような気がします。当時はチームワーク演習もOSCEもなかったです。

——そこは大学としても意識して増やしてきたところでもあるので、だいぶ変わってきた印象がありますね。

橘 私は少し違う風を感じるところがあつて。1期生ってそもそも1学年しかいなかったじゃないですか。だから、学科間で



助け合わないと何もできなかったんですよ。何するにしても、170人全員でやるしかなくて、

サークルひとつやるにしても、例えばバスケやりたい人のために、他のみんなが集まって手伝って、みたいな。その後1年ずつ人がどんどん増えていって、だんだん学食が混んでくるっていうのが嬉しかったですね。大学らしくなってきたなって。

教員として戻ってきて、みんなと、全学科合同で取り組むっていうことが、IPEだったりOSCEだったり今の形になっていて、なんか逆に、私が知ってる医療大らしい感じがしますね。

——一番最初のスタート地点に戻って、みんなで協力してやってるって感覚が近いのでしょうか。

藤田 私は2期生なのですが、1期生の先輩たちが後輩に対して、門戸が広いというか、一緒にやろうよっていう感じで、すごく優しくあったんですね。それが、卒業してしばらくして戻ってきた時に、1期生の先輩たちが作

ろうとしていた横の繋がりがっていうものが科目であったり、システムの横の繋がりを作るようなカリキュラムが変わっているなっていうのは一番感じたことです。形を変えて横の繋がりが、大学全体の繋がりが残ってるんだなって思いました。

橘 言ってしまうばうちの大学って地味ですよ。小さな大学だし、正直東京にある学校に行きたかったけど、とか思ってた入学してきた人もいるかもしれないですけど。でも、来たからには出る頃にはですね、出てからでもいいんですけど、「やっぱり医療大に来てよかったな」って言ってもらえるにしたいよねって話はよくするんですよ。派手さはないけど、実直で、来た人にしか分からない良さがある。

——先生方は医療大に「来た人」ということになりましたが、「来た人しか分からない良さ」というのは、どのようなところがありますか？

布施 僕は修士、博士と他大学に進学したのですが、両方とも規模の大きい大学だったので、ここにきて思ったのは、これぐ

らい近い方がいいなあということとです。生徒と教員の距離もそうですし、教員同士の距離も近いですよ。こういうところも学生にとってもいいんだろうな、なんていうふうには思っていますけど。

大江 学生時代のことを思い返すと、やっぱり先生たちがすごく大きく包み込んでくれたなっていうのは思います。型にはめようともされなかったし、自分たちの意見を尊重しながら導いてくれたなど。あと、活躍してる卒業生がすごく増えたので、現場に行ったときに、医療

▼医療大学のこれから

——大学として、または先生方個人として、今後の取り組みなど考えていることがありましたら教えてください。

布施 今年、鳥人間サークルを立ち上げて、琵琶湖に向けて飛ぶ準備をしています。サークル名は「ナイチンゲール」といいますが、阿見町の鳥がウグイスで、ウグイスを英語にするとナイチンゲールなんです。それと医療のイメージを掛け合わせて、というのが由来で。この前、法

大学が地域の方からも評価されていると感じることが多いです。卒業生も実習生に対して優しく接してくれているので、実習環境もすごい整ってきていると思います。

——人間関係というか、対人的な環境がうちの大学のすごいところなんですかね。

藤田 コンパクトゆえに、それがある感じがしますね。

橘 そのいいところが、「やっぱり医療大だね」って言われるような大学にしたいなと思っています。

政大学に視察に行つて、いろいろ教わってきました。今度は筑波大学に見学に行くことになっています。

——医療大で鳥人間コンテストというのは、すごく意外な組み合わせのように感じますが、どのようなきっかけで始まったのですか？

布施 医療大の名前を広めたいというのが最初です。「茨城県立医療大学」って大きく載った

飛行機が飛んだら、これは熱いんじゃないかっていう話が出たのが始まりです。

—— 飛びたいというよりは、医療大学を飛ばせたいという感じでしょか。

布施 最初はそれだったんですけど、今となってはやっぱり飛びたい気持ちが強いですね。阿見町は予科練の町でもあったので、飛行機っていうのもちよつと縁がある感じがしますよね。

藤田 大学全体の、付属病院も含めて皆さんの思いを翼に託すっていうのもありますよね。

布施 そうですね。できればゆくゆくはもう少し裾野を広げたくて、阿見町の小学生とかに飛



行機作りを手伝ってもらったり、障害のある方にも可能な範囲での作業を手伝ってもらうとか。

関わる学生にとってもいい経験になるのかなと思います。

藤田 子供さんとか、阿見町の若い子たち、これまで医療大学との接点が少なかった層のみなさんが、鳥人間を通して大学や、いろんな人たちと関わるきっかけにもなるのかなと思ってます。

布施 2月からクラウドファンディングを開始しました。ぜひ皆さんのご協力をよろしく願っています。



クラウドファンディングページ

—— 一つが鳥人間ですけども、ほかは何があるでしょうか？

橘 パラスポーツに関しては、阿部学長の重点施策にも入っています。パラスポーツ、特に車いすスポーツってリハビリとすごい関係が深く、もともとリハビリの中にスポーツを取り入れるところからスタートしてるんですね。そういう意味では原点回帰みたいなところもあると思います。

私が教員として大学に戻ってきた時には、車いすバスケのサークルができていました。で

もその時、「なんで健常者だけでやってるんだろう」って、ちよつと思っただんですね。自分はパラリンピックにも関わるようになってきた時期で、ずつと障害がある選手のサポートをしてきたので、「なんで健常者だけで車いす乗ってやってんの、立ってでkindeshou、あんだ達」ぐらいに思っただんですね。

だから、最初は遠くで見てたんですけどでも、一生懸命練習してるし、そのうちにコーチいなくなっちゃったっていう話になって結局関わることになったんです。

その時に、学生に対して、「やるんだったら、ちゃんと役に立てるようになってみたら」って伝えたんですよ。車いすに座れば健常者も障害者も混ざり合える、みたいに簡単な考え方で終わりにするのではなくて、車いすバスケを通して関わる人たちから求められる、役に立てる人たちに育ってほしいなと思って教え始めました。そうすると、学生たちはどんどん強くなっていって、車いすバスケを楽しんでいると思うようになっていきました。その様子を見て、『みんなと車いすバスケをする楽し

さ』を独り占めして終わるのではなく、その楽しさを誰かに伝えられるようになってほしいと思います、それが当時の学生さんと始めた地域在住障害児・者も参加できる車いすバスケ教室やいろんなボランティア活動につながっていききました。

東京オリンピック・パラリンピックを機会に、地域の中でも障害者の方がもっとスポーツをやっていききたいっていう声が上がりはじめて、そういうのは国の施策としても打ち出してるところなので、大学としても、地域貢献の一環として力を発揮できるんじゃないかなっていうことを考えたりしますね。

藤田 私は、地域貢献として、高齢者の健康増進のために、学外に出る機会が多いんですけれども、最近ようやく「医療大っていうものが身近に感じてきた」っていうふうに言われるようになってきたんです。

それは、地域に出ていく機会も増えてきたし、接する機会が増えてきたからだと思うんですけども、阿見町のおじいちゃんおばあちゃんたちも医療大学と関わる機会に対してすごくウエルカムな気持ちを持ってい

くれたんだな、という印象を持つようになりました。地域の皆さんと関わる機会って意外とありそうで、そこまでなかったのになって。

ようやく三十年とは言っても、地域との関わりはやつと最近産声をあげたんじゃないかなという感覚もあって、地域の方たちが「医療大があつてよかった」っていう気持ちをこちら側に投げかけてくれるようになっていくのをすごく感じます。地域に根ざしている大学という意味では、阿見町にまだまだ還元をしていく必要がありますし、地域の人にも大学と一緒に作っていただきたいと思っています。

それこそ鳥人間もそうですね。大学が地域に溶け込んでいくっていうのは向こう三十年でも大切にしていきたいことかなというふうには思っています。

作業療法学科の堀田先生がすごく精力的に地域に出ていて、そこから阿見町から機会をたくさんもらえるようになってきたっていうのは大きいのかなくて。学科の教員がこう旗を振って、他学科の教員たちを巻き込みながら、みんなで地域に出て行くこうっていうふうになってき

ているのがここ数年という印象です。

——4学科の繋がりとして、多職種連携教育（IPE）についてはどうでしょうか。

大江 多職種連携教育（IPE）コースができたのは、2013年の第4次カリキュラムからですが、開学当初から初代学長が「チーム医療」というのを一方針として挙げていて、私たちも在学中、IPEという科目名ではありませんでしたが、4学科合同で行う科目はありました。私自身、チーム医療という括りで習った科目はすごく臨床で役立ったと思っています。

実際にIPEがどのように臨床で生かされてるかというのはまだ未知で、測定も難しいため卒業生の実感によるところはありますが、多職種が一緒に学ぶことで得られることはたくさんあると思います。ただ、IPE自体、今ではどの学校でも導入されてきているので、今のままだと埋もれちゃうかなとも思っています。

本学の特徴としてやっていくIPEって何だろうと思うと、積み上げ式でコース化されている

ことで得られるものとか、これから病院もどろん在宅志向になっていくので、学生がもっと地域に目を向けて、先生たちの活動と一緒に入るとか、職種の垣根を超えて活動することを通して学んでいけると、より今後に繋がっていくのかなと思います。

橘 私たちからしたら、IPEってもう当たり前みたいな感じではあるんですけど、なんか他のところからすると、医療大って結構先行ってる感じなんですって。目の付け所がいいらしいですよ。今、他の医療系大学が一生懸命やろうとしていますが、うちではもう2クール前からいからやってるわけです。ここからどう発展させていくかもそうだと思うんですけど、蒔いた種がいよいよ芽を出してきて、今あることが当たり前な感覚を持つてることが逆にすごいというか。連携して進めていくのって結構大変なこともあるかと思うんですけど、うちの大学の規模だからできることでもあると思うんです。

自分たちにとって当たり前すぎて価値を感じてないようなところに、実はバリューがあるよな気がしています。

——20年前、30年前に新しい芽だったのが、今花咲いているという感覚ですが、次はどのような種が蒔かれていくのでしょうか。今後30年、さらにその先と、どんなふうさらに発展していくかと思っていますか。

橘 地域から見ても、どういう大学なのか知られていない、そういう敷居の高さみたいなを感じている人も多いみたいです。でも、地域向けの教室みたいなやると県立大っていう安心感があるから、みなさん来たいと思うてくれるらしいですよ。

三十年後も残っていいよって、県民の皆さんに言っていたためにどうあるべきかっていうと、単なる大学としての機能だけではもう淘汰されちゃうと思うんですよ。筑波大みたいに大きい大学に全部飲み込まれる、みたいなこともあるかもしれない。そこで我々がこの大学を残したい、発展させていきたいというのであれば、もつともっと解放するべきだと思っんです。病院も、大学も。

これから先、子供が減るのは確実で、そうしたら留学生を増やすか、シニアの入学生増やすかしないと学生いなくなります

からね。40代50代60代とか、もしかしたら70代とかでも、死ぬ前に自分の体のことを知って死にたい、っていう人もいるかもしれない。

布施 あと、企業に目を向けてみるのもいいんじゃないかって。放射線技術科学科は企業に行く学生も結構いて。いろんなキャリアパスがあるんだよっていうのを最初の頃から見せるのもいいかなと思います。出口は広くしておかないと、これからどんどん入ってこれなくなっちゃうんじゃないかな。

橘 理学療法士にならなくても生きていける人を育てているかなっていうのは、時々、はつと思うところですよ。理学療法士にしかねない人を育てちゃってるんじゃないかなって。

——それこそ、先生方のように研究者になるという道もありですね。本日はありがとうございました。



鳥人間のポーズ！

厚生労働省より茨城JRATによる被災地支援に関して 感謝状が贈呈されました

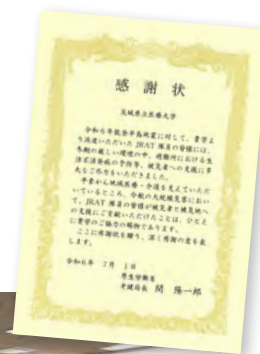
本学 浅川育世教授（理学療法学科科長）が茨城JRATの隊員として石川県へ派遣され、令和6年能登半島地震におけるリハビリテーション支援活動を行いました。

JRAT（日本災害リハビリテーション支援協会／Japan disaster Rehabilitation Assistance Team）は、発災時において被災者・要配慮者の生活不活性発病や災害関連死等の予防に関する適切な対応を可能とすることで、被災者が早期に災害を乗り越え、自立生活を再建、復興できることを目的として発足したものです。

令和6年能登半島地震においては、避難所における生活不活発病の予防等、被災した方々への支援を実施しました。

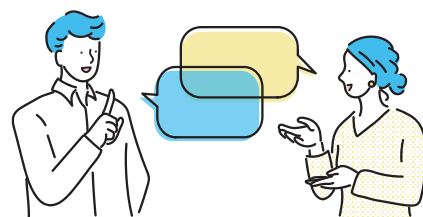
また、この度の実績について、厚生労働省より感謝状を賜りました。

感謝状はJRAT、47都道府県の地域JRAT、現地へ派遣チーム員を送り出された全国の463の病院・施設に対して贈られました。



阿見町内公共施設で 「フレイル予防教室」を開催

阿見町内の通いの場（さわやかセンター、ふれあい地区館）にて、阿見町と協働で、本学と本学附属病院の医師・理学療法士・看護師による「フレイル予防講座」を開催しました。「フレイル」は「健康」と「要介護状態」の中間の状態、放っておくと時間の経過とともに、あるいはちょっとしたきっかけがあると急に、要介護に陥ってしまう状態です。教室では、体力測定で参加者自身の身体の状態について知った後、フレイル予防についての講話、本学学生がプログラムを作成した「IPUHS運動」や、口のフレイルを予防するための「口腔体操」など、普段の生活の中に取り入れることができるフレイル予防の活動を行いました。



筑波大学医学類との合同授業 「インタープロフェSSIONAL演習」を実施

本学では、保健・医療・福祉領域の垣根を越えて多職種と連携・協働できる医療人のための全学科共通カリキュラム「多職種連携教育（IPE）コース」を開講しています。1月14日には、全学科の2年生が筑波大学・医学類の学生と合同で講義を行い、実際の事例に即した課題をもとに、それぞれが目指す職種の立場から、どのようなアプローチが考えられるかグループで話し合い、多職種間の協働やチームビルディング手法を実践的に学びました。



医療大学トピックス

2024年度にあった出来事をピックアップしてご紹介します。

株式会社茨城ロボッツ・スポーツエンターテインメントと 連携協定を締結しました

本学と株式会社茨城ロボッツ・スポーツエンターテインメント（代表取締役社長：川崎 篤之、茨城県水戸市）は、令和6年8月2日（金曜日）に連携協定を締結いたしました。

株式会社茨城ロボッツ・スポーツエンターテインメントは本県でプロバスケットボールチーム「茨城ロボッツ」を運営しており、スポーツを通じた地域貢献活動に幅広く取り組んでいます。また、本学は、公立保健医療系大学として国内唯一の付属病院を有し、地域におけるリハビリテーション医療の発展に寄与する教育や臨床研究を行っています。この度の協定締結は、スポーツと医療との結びつきを進展させ、相互のより緊密な連携協力により、地域の発展及び人材育成を図ることを目的としたものです。

■出席者

株式会社茨城ロボッツ・スポーツエンターテインメント
川崎 篤之 代表取締役社長
茨城県立医療大学 阿部 慎司 学長

■連携事業

- (1) 知的資源、人的資源および物的資源を相互に活用した教育・研究に関すること
- (2) 茨城県の地域の発展と活性化に関すること
- (3) インターンシップ事業等の人材育成に関すること
- (4) 共同で実施する事業の企画及び推進に関すること
- (5) そのほか双方が必要と認める事業に関すること



2024年度新規着任・昇任教員

東條 佳子 4月1日着任（助教 放射線技術科学科）
 野坂 広樹 4月1日着任（助教 放射線技術科学科）
 深見 美希 11月1日着任（助教 助産学専攻科）
 山波 真理 4月1日昇任（教授 看護学科）

山海 千穂子 4月1日昇任（准教授 看護学科）
 石森 佳幸 9月1日昇任（教授 放射線技術科学科）
 松田 英子 9月1日昇任（講師 看護学科）
 布施 拓 2月1日昇任（准教授 放射線技術科学科）

2024年度定年退職教員定年退職教員

～長い間、本当にありがとうございました～



「一意専心」

開学から29年という長い間、放射線技術科学の「教育・研究」に従事できたことは私の誇りです。振り返れば、「特色ある大学教育支援プログラム（課題名：自己発展性を備えた医療専門職人の育成）」への応募と採択、「大学院博士後期課程の設置」など、素晴らしい思い出・経験と共に、多くの困難にも立ち向かったことを思い出します。これら全て皆様の協力と支えがあってできた事です。

放射線技術科学科教授
森 浩一

私の「教育・研究」で共に歩んでくださった同僚、学生、事務局、関係者の皆さんに心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。



茨城県立医療大学では2006年から2024年までの19年間、医科学センター教授として勤務させて頂きました。非力ながら解剖学の教育、多職種連携（IPE）科目の立ち上げ、研究倫理委員会を始めとする様々な委員会活動、医科学センター長などを担当させて頂きました。

医科学センター教授
馬場 健

在職中はみなさまに助けて頂きなんとか定年を迎えることができました。本当にありがとうございました。今後は研究教育職を離れて、ゆっくりと好きなものづくりに取り組んでいこうと思っています。開学30周年を迎える茨城県立医療大学の益々のご発展をお祈りいたします。



2003年4月に着任後、私のキャリア史上最も長い年月を茨城県立医療大学で過ごしました。途中5年間を県立中央病院で現任教育に関わらせていただいたことも、その後の看護・研究活動の糧となりました。この21年間は多忙で、夢中で走り抜けた感がありますが、振り返れば多くの皆様に支えられ、たいへん充実した幸せな時間でした。

看護学科教授
吉良 淳子

最近は看護学科の卒業生が臨床で重要な役割を担う姿に出会うことも増え、誇らしく感慨深い思いに満たされます。関係各所の皆様に心からの感謝をお伝えするとともに、本学のますますのご発展を祈念申し上げます。



2016年に放射線技術科学科の教授として着任して以来、医療大学の学生の皆さんと、医療従事者として臨床現場で力を発揮できるよう、日々努力を重ねて教育してきた日々は、私にとってかけがえのない経験となりました。

付属病院長／教授
中島 光太郎

さらに、2021年以降は、付属病院長として、第2次アクションプランの目標達成を目指し、付属病院の経営の立て直しに注力した結果、2023年度には望外の成果を上げることができました。2024年4月には新たなCTとMRIを導入することもできました。

これらの成果は、ひとえに教官の皆様、職員の皆様、そして、大学にかかわるすべての関係者の皆様からの温かいご支援とご協力の賜物です。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、茨城県立医療大学と付属病院のますますのご発展、そして皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



藝游會

Alumni Association

同窓会「藝游會」の活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝いたします。2024年6月9日に、出席者10名にて定期総会を開催いたしました。議事録は同窓会報「藝游」に掲載し、公開しております(<https://www.ipu.ac.jp/about/related-organ/alumni-association/>)。

◆第9回（2023年度）卒業生交流セミナーの開催報告

2023年度の卒業生交流セミナーは、放射線技術科学科が担当し、定年退官された加納尚美教授の最終講義をZOOM配信いたしました。「声をきき、声をつくり、声をとどける」をテーマでお話をいただきました。学部のみならず、大学院や助産学専攻科の修了生など、多くの方々にご出席いただき、盛大に執り行われました。藝游會より、加納先生への感謝とご健康を祈念し、記念品を贈呈いたしました。

◆【開学30周年記念事業】大同窓会の開催

2024年10月26日に、開学30周年事業の一環として、創療祭と同時に大同窓会が盛大に開催されました。今回の同窓会は、現地とオンラインのハイブリッド形式で実施し、140名以上の卒業生や教職員にご参加いただきました。当日は、懐かしい友人や教員との再会、在学生との交流を通じて参加者の皆様が楽しいひとときを過ごされました。全体会の後は、各学科に分かれ交流会を行い、大変充実した会となりました。今回の同窓会は、皆様のご協力のおかげで、無事に成功を収めることができました。心より感謝申し上げます。今後も、このような機会を通じて、同窓生同士の絆を深めていけることを願っております。



◆会報「藝游vol.24」の公開

会報「藝游」は大学ホームページからご覧になれます。「藝游vol.23」より、誰でもアクセスできるようパスワードなしでの公開となりました。クラス幹事が工夫を凝らし、4クラス分のクラスページを作成いただきました。ご協力有難うございます。卒業生だけでなく在学生にとっても興味深い内容となっておりますので、QRコードよりアクセスし、是非ご覧ください。



◆藝游會の在学生支援事業の報告

在学生支援事業として、附属図書館に国家試験対策図書を寄贈しております。2024年度は28冊を新規購入いたしました。また、各学科の事情に応じて、国家試験対策業者模試費用の支援を行いました。

◆寄付事業「つなげよう！IPUHS支援基金プロジェクト！」

在学生の経済的影響に関する支援「つなげよう！IPUHS支援基金プロジェクト」では、皆様よりご支援いただいた寄付金を今後も在学生への様々な支援に活用していく予定です。

引き続きご協力賜りますよう、お願い申し上げます。

お問い合わせ

E-mail: geiukaigrad@ipu.ac.jp (藝游會事務局)

会長 橋 香織 (PT1期生) 茨城県立医療大学理学療法学科准教授

キャリア支援センター

今年度の活動報告

お問い合わせ
及び就職相談
申込先

茨城県立医療大学キャリア支援センター

Tel. 029-840-2109 E-mail: career@ipu.ac.jp

業務時間：8:30～17:15（土日、祝日を除く）

今年度は新たに看護学科2年生を対象としたコミュニケーション講座と主に理学療法学科4年生を対象とした就職説明会を実施しました。また、今年度も病院見学バスツアーを開催し、8月に県北地域、9月に県央地域に伺いました。

◆新講座の実施

「日テレ式コミュニケーション講座」の開催報告

看護師は高いコミュニケーション能力が期待されていることから、低学年のうちからコミュニケーションを体系的に身に付ける機会を設けるため、ワーク方式のコミュニケーション講座を開催しました。学生からは「コミュニケーションのトレーニング方法も教えていただき、実習でも役立つと思う」との感想がありました。

「理学療法学科就職説明会」の開催報告

初めての開催でしたが、県内の31施設がオンラインで参加してくださいました。参加した学生からは「1施設15分という時間ではあったが、日々の業務や新人研修の話について伺うことができた。また、採用試験についても説明があり大変有意義な会であった」との感想がありました。4年生を対象としていましたが、3年生も積極的に参加してくれました。



◆病院見学バスツアー

県北地域では高萩協同病院と志村大宮病院を見学させていただきました。また県央地域では、水戸赤十字病院、茨城県立中央病院、茨城県立こころの医療センターを見学させていただきました。参加した学生からは、「地域の事情や高齢化の課題と向き合いながらも患者さんの生活を大切にしている病院の姿勢を知ることができた」、「医療大の卒業生が多く働いており、就職先としても考えるきっかけになった」との感想がありました。

春には鹿行地域に伺い、医療機関の方々の御協力により、今年度は3回病院見学バスツアーの実施が可能となりました。



Coffee Break

人生には、自分を見つめ直し、価値観が大きく変わるような転機が訪れることがあります。私にとってのその一つは、バックパッカーとしてヨーロッパを旅していたときの出来事でした。

イギリスの駅で、20分遅れで到着した電車を降りた際、プラットフォームに掲示されていた「on time (時間通り)」という表示に衝撃を受けました。「ありえない!」と思いましたが、現地ではそれが日常的で、誰も遅れを気にしていません。その瞬間、自分がいかにせわしなく生きていたかを少し恥ずかしく感じると同時に、日本人特有の几帳面さや正確さに誇りを持つ気持ちも芽生えました。

少し大げさですが、あの体験は、私にとって価値観を広げる大きな転機となり、物事の捉え方をより柔軟にしてくれました。人生の中で、こうした一つ一つの出会いや経験が自分を成長させる糧になります。今後もしもワクワクできる転機に出会えることを楽しみに過ごしているところです。

作業療法学科 助教 真田 育依

開学30周年記念ロゴマーク



「デザインのコンセプト」

大学ロゴマークをベースに、「30」の文字と、前進する車いすをデザインしました。そのまわりを彩る茨城県の花・バラには、県章をイメージした青色を使用しました。青いバラには「夢をかなえる」という花言葉があります。

卒業生の方へ

卒業生との交流会等の企画・開催、大学情報を発信するため、勤務先や住所に変更があった時は、必ず電話又は書面もしくは本学ホームページに掲載している「卒業生連絡先等調査」入力フォーム (<https://www.ipu.ac.jp/mailform.php?code=5>) により、お知らせください。



茨城県立医療大学 IPUHS通信 vol. 012

発行月：2025年3月

発行：茨城県立医療大学

問合せ先：茨城県立医療大学

〒300-0394

茨城県阿見町阿見4669番地の2

Tel. 029-888-4000

Fax. 029-840-2301

本誌は年1回発行しております。
本誌に対するご意見ご要望を是非お聞かせください。

 shomu@ipu.ac.jp



茨城県立医療大学公式Webサイト

 <https://www.ipu.ac.jp/>

茨城県立医療大学 広報 X (旧Twitter)

 @ipuhs_publicity



茨城県立医療大学 広報 Instagram

 [ipuhs_publicity](https://www.instagram.com/ipuhs_publicity)